

---

# **満員電車の椅子取りゲーム**

ぬじゅわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満員電車の椅子取りゲーム

### 【NZコード】

NZ748M

### 【作者名】

ぬじゅわきし

### 【あらすじ】

満員電車でよく人が争って席を座る光景をみますが、それをさらに極端化するどざつなるのか・・・「座席」の座を賭けた人々の死闘！！！

(前書き)

擬音語を漢字にしてこら點に注意。

月並駅、午前六時五十三分。天気はやや曇っていて青空は見えつつも、太陽は雲に覆われていた。したがつてあたりは薄明かるかつた。

駅のホームに一面に人々が立ち並んでいる。道路から走る車の音、住宅街からは微かな喋り声が聞こえるがホームでは皆、慎と黙りこくっている。そこには張り詰めた対決の雰囲気を感じる。一陣の風が吹く。

やがて太陽が雲から徐々に姿を現していった。太陽の光は、ホームから遠くのガラス張りのビルに反射し、ホームの人々の目へ喝と照らす。人々は光を避けようと目を細めるが、大してそれらを気にせずに、やがて来るであろう戦いの合図を待ち続いている。

太陽が徐々に姿を現し、やがて、ホーム全体を照らし出した時、踏切の音が乾乾と聞こえた。人々はいっせいにその方を見て、ついに来たかと覚悟を決めた。やがて戦いの始まりを告げる合図のアナウンスが聞こえた。

「一番ホームに、急行馬並行の電車が参ります。黄色い線まで下がつてお待ち下さい。」

そして来るべき戦場である電車が餓多御徒と音を立てながら着いた。車内を見ると満員だ。だがここは終点なので、まずホームの人々よりも向こう側の、降車用ホームの方に扉が開き、電車は徐々に空いてくる。ホームの人々は空いた電車の席を渴望の眼差しで捉え、激しい執念を抱いていた。

やがてこちらがわのドアが開いた。その途端戦いの火蓋は切り落とされた。人々は次々と電車に乗り込み、我先にと椅子に座ろうと奮闘した。何人か押し倒され、そのまま頭禍頭禍と踏まれた。青年が椅子に座ろうとして、だが座らせまいとおばさんが猛高速で青年の

尻を突き飛ばすなど揉めに揉め、やがて誰が座ったかはつきりしてきた。最初の脱落者らは勝利の座に座っている人々に激しい憎しみと嫉妬を抱き、鋭い眼差しで睨んだ。座っている人々も座れた事に悦に浸つており、この座は渡さぬ、下賤な落伍者めと睨み返した。

そして扉が閉まり、電車がと動き出した。座れなかつた人は仕方なく、「つり革」と言う屈辱の紐にする事がとなり、畜生と悔しがる人々を、椅子に座つている「座席」の人は、侮蔑をこめた優越感に浸りながらも嘲笑つた。

だが、状況が変わる。「つり革」の老人が会社員を睨んだ。しまつたと「座席」の会社員が思つた。老人はにらんでいた。さあ、どうするんじや、年寄りにに席を譲るのがこの戦いのルールじや、ルールを破ればどうなるか、知つてあるじやろう…老人の意志が伝わつた「座席」の会社員が恥、と舌打ちしながら席を立つて「どうぞ。」と言つた。老人はありがとうを言う代わりに勝ち誇つた眼差しで示露示露と眺めたため、会社員は激しく憤つたが、すんでの時点で殴るのを止めた。周囲の目があつたからだ。

それをみた緑のシャツの青年は、優先席ルールがあるじゃないか、ならば足を折ればいい、と考えた。そこで青年は扉を蹴り始めた。骨折するまで何度も蹴るつもりである。頑頑と音が響いた。

「まもなく人並、人並、お出口は左側です。」

そのアナウンスが流れた時「座席」のある男が携帯をポケットにしまい、さながら次の人並駅に降りようと言う素振りを見せた。彼の目の前に立つていた「つり革」の三人は彼を注視した。彼が電車の座から降りる。誰が椅子に座るのか。俺だ、僕だ、私よ。三人の間に火花が散つた。

人並駅について男が座席に立つた途端激闘が始まつた。三人は取つ

組み合いで、まず中年のおやじが少年を床に投げ飛ばし、次に女子高生が中年のおやじのつむじめがけて踵落としし、女子高生除いて皆昏倒した。女子高生は「レディーファーストを守るのね」と言い放つて席に座った。二人の男は床に伸びたままほつとかれた。しばらく沈黙が続いた。聞こえるのは電車の画单誤豚、と言う音と、緑シャツの青年の願願、とひたすら扉を蹴る音だけだ。青年は未だに、骨を折る事に骨を折つていた。

そして、ついに「つり革」と言つ立場の屈辱に耐えきれなくなつたあるおじさんが、「わしはすわるんだ!…どけ!」と前の「座席」の少年を床に投げ飛ばして座つた。たちまちルール違反だと周囲から制裁が来た。おじさんは座席から引きずり下ろされ、扉を蹴り続けている緑シャツの青年は扉からどかされ、扉はこじ開けられておじさんはそこから放り出された。おじさんの悲鳴が後を引いた。

「にゃああああああああ……・・・・・・

「まもなく、菅並、菅並、お出口は、右側です。」

アナウンスが流れた。「つり革」達は似矢と笑つた。菅並駅は大きな駅で各停に連絡する。つまり、「座席」から立つ人が多いのだ。渴望の眼差しに見つめられた「座席」の人たちは不安に陥り、同時に「ここに座つたらに席を渡したくない」と言つ葛藤すらあつた。

だが菅並駅に着き、扉が開く。「座席」の多くがどうにか席を立つた途端大乱闘が起きた。

「僕の席だ!」

「いや、俺だ!小僧は引っ込んでる!」

「あたしよ!あたし!」

「ははつ座つたぞ!いえーい。」

「何で…私にも座らしてよ…ひどい…だいつきらい。」

「しょうがないだろ?…」「なんですか?…悪いいい…」

あちらこちらでトラブルが発生する中、緑シャツの青年は未だに扉を蹴り続けていた。もはや彼は扉を蹴る事しか頭になかった。だが、頑頑や願願のような激しい音ではなく、凡・凡・と力無かつた。

だが、やがてようやく、親指の捻挫みたいな事になると、彼は「やつたあああ！」と乱舞できなかつたが狂喜した。そして、「座席」の人に近づいて言った。

「さあー! ゆずれ!」

その時、「まもなく、終点、馬並、馬並」と言うアナウンスが聞こえた。もづ、終点! — 青年の脳裏が一瞬真っ白になつた。「座席」の人は勝ち誇った顔で「どうぞ」と皮肉たっぷりに青年に言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2748m/>

---

満員電車の椅子取りゲーム

2010年10月15日17時02分発行